

# 『聖德太子伝宝物集』における片仮名表記について

——小書から大書への切り替えに注目して——

橋村 勝明

## 一、はじめに

内閣文庫に所蔵される『聖德太子伝宝物集』<sup>1</sup>は、天正一四（1586）年の書写奥書を持つ漢字片仮名交じり文の資料である。但し、訓点付きの漢字文と、漢字と片仮名大書小書<sup>2</sup>による漢字片仮名交じり部分とを混在させる文章となっている。漢字文は、例えば巻一冒頭部にみられる。

▲竊<sup>ニレハ</sup>以<sup>レ</sup>天朝秋津嶋<sup>ノ</sup>之<sup>ヲ</sup>為<sup>レ</sup>嶋<sup>ニ</sup>為<sup>レ</sup>国<sup>ト</sup>其源<sup>尚<sup>カナヤ</sup></sup>▲矣凡神祇開闢<sup>ノ</sup>之國大聖利物之壤<sup>也</sup>故天<sup>ニ</sup>神<sup>ヲ</sup>以<sup>レ</sup>之垂<sup>レ</sup>跡地祇以<sup>レ</sup>之為<sup>レ</sup>栖<sup>ヲ</sup>是以神記<sup>卷<sup>ニ</sup></sup>▲云国源之始玄廣祖<sup>クニトコ</sup>常立<sup>タテ</sup>尊<sup>ニ</sup>国扶<sup>ト</sup>槌<sup>ト</sup>尊<sup>ト</sup>▲豊斟<sup>ト</sup>淳<sup>ト</sup>尊<sup>ト</sup>以上三代陽神乾道獨化<sup>セリ</sup>

用例末尾の「セリ」は本行に記されているので、小書と判断するが、それ以前の部分については返り点<sup>3</sup>がみられること、漢字幅の行内に片仮名が位置していないことから、漢字文であると思われる。同じく巻一の一六丁表では倒置記法<sup>4</sup>がされないために訓点<sup>5</sup>が無く、片仮名の小書と大書によって記される部分がある。

諸惡莫作ノ教法弘▲通<sup>セント</sup>誓願ヲ立ツ、要照ノ宮室ヲ辞<sup>セ</sup>給<sup>テ</sup>▲佛ノ御弟子ト成リ如来ノ妙法ヲ聽受<sup>シテ</sup>星霜▲漸<sup>ク</sup>カサナリ年齢屢ツモリツ、終焉之夕部<sup>ニハ</sup>▲宮圍風閑<sup>ニシテ</sup>西山月傾聖衆来迎<sup>シ</sup>紫雲▲空<sup>ニ</sup>聳妓樂蒼天<sup>ニホノカニ</sup>テ曼陀曼珠ノ花▲宮掖ニ雨下正念端坐<sup>シテ</sup>寂然<sup>トシテ</sup>薨逝<sup>ス</sup>

更に、これら二種の表記を混ぜる、つまり漢字片仮名交じり部分に一部倒置記法を用いる部分も存する。一卷一二丁表・裏には次の用例がみられる。傍線部分が返り点が付された倒置記法であり、その前後は行中に記された片仮名がみられる漢字片仮名交じり文となっている。

御先生ハ大唐衡山般若臺▲修行<sup>シテ</sup>南岳<sup>ニ在<sup>マハ</sup></sup>其御名<sup>ヲ</sup>南岳ノ惠恩禪師▲申<sup>ケリ</sup>彼禪師依<sup>テ</sup>往昔ノ宿願<sup>ニ</sup>六生<sup>ノ</sup>間修行▲衡山<sup>ニ</sup>給<sup>テ</sup>是併日本来生佛法弘通之加行▲也是以第七生<sup>ニハ</sup>倭国用明天皇宮内<sup>ニ</sup>誕<sup>シテ</sup>生<sup>シテ</sup>諸善奉行諸惡莫作ノ教法流布<sup>シテ</sup>断惡修善ノ棟梁<sup>ト</sup>成給<sup>フ</sup>

このように、一資料中に複雑な表記体系を持つのである

が、そのために片仮名小書と仮名点との判別が難しい部分がある。先に掲げた用例は、以下の基準によって翻字をしているものの、見方によっては別の解釈の可能性はある。以下に示す用例は全てこの基準に従っている。

〔仮名点と片仮名小書きとの判別基準〕

仮名点

- ・ルビ行に記されている
- ・漢字間が通常の間隔である
- ・一・二点等の返点とともに付されている

片仮名小書

- ・本行内に記されている
- ・漢字間が片仮名に配慮し空いている

返点が使用されている部分は漢字文であるとみれば、その部分に使用されている片仮名は仮名点であるとして良いかもしれないが、偶々倒置記法がされない漢字文である場合にはその判別は困難となる。そこで、このような複雑な表記体について、その特質の一端を明らかにすべく片仮名表記<sup>3</sup>、特に小書から大書への切り替えについて検討をする<sup>4</sup>。切り替えに注目するのは、そこに文字表記上の境界が何に基づいているのかを知るためである。切り替えとは、次の例にある傍線部分を指す。

紫雲<sup>ニ</sup>空<sup>ニ</sup>聳<sup>ヒキ</sup> 妓樂蒼天<sup>ニ</sup>ホノカニテ曼陀曼珠ノ花  
▲宮掖<sup>ニ</sup>雨<sup>フリリ</sup> 下正念端坐<sup>ニ</sup>寂然<sup>トシテ</sup>薨逝<sup>ス</sup>

(一、一六ウ3)

小書と大書との切り替えは、基本的には小書から大書であり、小書の直前は漢字である。従って、漢字を「漢」、片仮名を「片」とすると、

漢<sub>片</sub>片

となっている。

本稿では『聖徳太子伝宝物集』の小書と大書との切り替えについて検討をする<sup>5</sup>が、その方法としては内閣文庫本とほぼ同文である光久寺本とを比較しつつ進めたい。光久寺本は四巻本・四巻末のみ現存しており、その本文は内閣文庫本の九巻本・九巻末に対応している。従って、本稿ではこの範囲を検討の対象とする。

その範囲において、内閣文庫本には片仮名大書から小書への切り替えが3例存する。

〔名詞の後〕

○妹子<sup>ニ</sup>大臣思<sup>ハク</sup>我朝<sup>ノ</sup>内裏仙洞ノ雲ノ上<sup>ニ</sup>天上ノカサリ<sup>ニ</sup>幾千万ノ 超過トモ覚<sup>ヘス</sup>カ、ヤキワタリケレハ

(九末、八ウ1)

〔捨て仮名の後〕

○又僧等<sup>ニ</sup>曰<sup>ケ</sup>授<sup>テ</sup>經<sup>ヲ</sup>竟<sup>ニ</sup>指<sup>テ</sup>南峯ノ上<sup>ニ</sup>一ノ石塔<sup>ニ</sup>云<sup>ク</sup>彼<sup>レ</sup>思<sup>ハ</sup>思<sup>ハ</sup>禪師遷化ノ骸骨之塔也

(九末、一二ウ5)

〔語中の小書〕

○コレマ<sup>ニ</sup>依<sup>テ</sup>勅<sup>ニ</sup>命<sup>ニ</sup>宿々留々モアリ

(九末、九ウ7)

光久寺本の片仮名大書から小書への切り替え例は2例存する。

〔助詞の後〕

○其<sup>ヲ</sup>河<sup>リ</sup>渡<sup>リ</sup>ナハ則<sup>ニ</sup>百濟<sup>ノ</sup>国<sup>ニ</sup>境<sup>ニ</sup>入<sup>リ</sup>也其ヨリ王城<sup>マ</sup>テハ八十余箇<sup>ノ</sup>日<sup>ヲ</sup>行<sup>ク</sup>路<sup>也</sup>也  
(四末、三才6)

〔語中の小書〕

○サレハ霧<sup>キリ</sup>霞<sup>カス</sup>ハタヘヲ通<sup>シ</sup>身<sup>ミ</sup>命<sup>ノ</sup>アヤウ<sup>カル</sup>ヘシ

(四末、三ウ5)

これらの用例については用例数が少ないために、検討の対象からは外し、小書から大書への切り替えに限定する。

## 二、内閣文庫本と光久寺本との比較

内閣文庫本と光久寺本の片仮名小書大書の切り替えについて、まずは用例数を比較しておきたい。内閣文庫本における小書大書の切り替え例は106例あるが、そのうち小書が文末で後続する文頭が片仮名大書であるものが1例、大書から小書への切り替えが4例あり、それらを除いた小書から大書への切り替えに関わる小書の用例は次表のとおりである。

表一 内閣文庫本における切り替えに関わる小書の品詞

付属語	助詞	54
	助動詞	12
自立語	動詞	1
	形容詞	3
活用語尾	動詞	23
	動詞＋助動詞	2
	動詞＋助詞	2
	副詞の一部	3
名詞の一部		1

表中活用語尾の「動詞＋助詞」のようにしているのは、小書と大書の切り替えが必ずしも現代の古典文法の枠組みに収まっていないからで、例えば次のような用例がそれである。

○海邊<sup>スル</sup>近<sup>ニ</sup>ク樓閣<sup>ヲ</sup>構<sup>テ</sup>日本<sup>ノ</sup>臣<sup>ノ</sup>卿<sup>ノ</sup>至<sup>ル</sup>時<sup>ハ</sup>妓樂<sup>ヲ</sup>歌詠<sup>シ</sup>モテナシ  
興<sup>スル</sup>宴<sup>スル</sup>所<sup>也</sup>也  
(九末、二ウ4)

また、動詞の用例としている1例は、次に掲げるように補助動詞である。

○太子<sup>大ニ</sup>悦<sup>ビ</sup>テ奏<sup>玉ヒ</sup>天皇<sup>ニ</sup>厚<sup>ク</sup>以<sup>テ</sup>答<sup>レ</sup>之<sup>ヲ</sup>  
(九本、二二才3)

補助動詞は自立語ではありながらも語義としては自立性が低いとみることができれば、切り替えに関わる小書は何れも自立性が低い語であるといえよう。同じく1例である

名詞の用例は、動詞連用形から転じた名詞である。

○心ツヨクスキ行ク臣ノ思<sub>ヒ</sub>サスカニ忍<sub>ヒ</sub>カタクソ覚ケル

(九末、一〇ウ3)

この用例についても、動詞の活用語尾と同じく扱われているものと考える。

次に、大書の用例数を掲げる。

表二 内閣文庫本における切り替えに関わる大書の品詞

自立語	動詞	38
	動詞 + 助詞	2
	名詞	10
	形容詞	6
	形容動詞	2
	副詞	2
付属語	助動詞	25
	助詞	16

表一と比較すると自立語の用例数が多くみられるが、助動詞の用例数が動詞に次いで26例であることが注目される。このことについては次節で検討をする。

次に、光久寺本の用例数を掲げる。光久寺本では小書大書の切り替え例が38例存するが、そのうち語中の切り替え、大書から小書への切り替えがそれぞれ1例存する。それらを除いた用例数が次表である。

表三 光久寺本における切り替えに関わる小書の品詞

付属語	助詞	25
	助動詞	3
自立語	名詞	1
活用語尾	動詞	4
	動詞 + 助動詞	3

内閣文庫本と同様小書は付属語の用例が多いが、唯一みられる自立語の用例が次のものである。

○太子御馬深水田<sub>ヲ</sub>スチカヘニ打渡<sub>リ</sub>給<sub>ヒ</sub>ケレハ御馬足<sub>ヲ</sub>トソフ<sub>ノ</sub>トナリケレハ其ヨリソフノスチカイトモ申也

(四本、一四ウ6)

「ヲト」が小書であること、そして抑も「音」が片仮名表記であることに疑問が残るところであるが、本稿ではこれ以上言及しない。

次に大書の用例数を掲げる。

表四 光久寺本における切り替えに関わる大書の品詞

自立語	動詞	14
	名詞	7
	形容詞	2
	形容動詞	2
	副詞	1
付属語	助動詞	8
	助詞	2

切り替えに関わる大書では、内閣文庫本と同様その用例数の多くは自立語が大書で表記される一方で、個別にみても用例数の最も多い14例の動詞に次いで、助動詞の8例であることについても同様の傾向として指摘できる。

抑も同文的箇所でありながら内閣文庫本と光久寺本とで用例数の差があるということは、それぞれの片仮名使用の方針が認められるところではあるが、小書大書の切り替えに関しては、付属語を小書とし自立語を大書とする、また助動詞については大書するという共通の傾向がみてとれるということである。

### 三、小書に後続する大書の助動詞について

小書される語は内閣文庫本、光久寺本の両資料に共通して付属語であったにも関わらず、大書においても助動詞の用例数が比較的多くみられた、ということについて用例に基づき検討をしたい。

まず内閣文庫本の助動詞大書の用例を掲げる。用例は25例で、助動詞「ケリ」が最も多く11例、「ベシ」が7例、「タリ」が5例、「ナリ」が1例、「ズ」が1例となっている。それぞれの用例を掲げる。

「ケリ」11例

○即<sup>チ</sup>目<sup>メ</sup>冥<sup>メクラ</sup>胸<sup>クラ</sup>サワキ鼻口ヨリ血ヲ出<sup>シ</sup>前後不覚<sup>ニ</sup>シテ皆以<sup>テ</sup>倒<sup>レ</sup>臥<sup>ニ</sup>ケリ (九本、二オ4)

○漫々タル鯨波ヲ凌<sup>テ</sup>沈々タル風雲ヲ渡<sup>リ</sup>テ既<sup>ニ</sup>明州<sup>ヘ</sup>付<sup>ニ</sup>ケリ (九本、六オ6)

○凡<sup>ニ</sup>舩走<sup>リ</sup>風アラクシテ浦々嶋々<sup>ニ</sup>テ五人ハ空<sup>ニ</sup>失<sup>ニ</sup>ケリ (九本、九ウ5)

○嶮難ノ山路長遠ノ深山ヲ径<sup>ニ</sup>渡<sup>ル</sup>尋<sup>ネ</sup>上<sup>ニ</sup>程ニ衡山四十里ノ山路付<sup>ニ</sup>ケリ (九本、九ウ7)

○日ノ光<sup>リ</sup>雲ノタヘマヲシルヘニテ日カケノ小馬ヲハヤメテ足<sup>ニ</sup>任<sup>テ</sup>行程ニ衡山近ク付<sup>ニ</sup>ケリ (九本、一一オ7)

○其国ニ大王御在<sup>ス</sup>勝明王ト申<sup>シ</sup>ケリ (九本、九オ7)

○太子行<sup>見</sup>テト如何ノ彼林ヲ御覽<sup>シ</sup>ケルニ凡<sup>ニ</sup>夫ノ目<sup>ニ</sup>ハ蜂<sup>ト</sup>ミヘ

ケレトモ

(九本、八ウ6)

○其音樂調之儀式ハ帝釈十善ノ摩尼殿歡喜園ノ五妙ノ化樂モ此ニハ過シトソ思ヒケル

(九末、九オ6)

○輒之住給ヘリケル其ニ當レル也ト云

(九本、一六オ1)

○霰電常ニフリ下リ霜電ヒマナクテ身破リ心摧キケレハ心ナラス岩ノハサマニ

(九末、一〇オ5)

○太子可三拜ニ別々宮ニ之由ヲ奏聞シ給ヒケレハ天皇垂テ涙ヲ詔シテ曰ク

(九本、一二ウ6)

〔ヘシ〕 7例

○サレハ霧霞膚ヲトヲシテ身命危カルヘシ

(九末、四ウ5)

○袈紙袈蓑笠舩ノ物ヲ用意スヘキナリ

(九末、四ウ6)

○弟子等尊レ法ヲ傳レ燈ヲ末法之初ニ佛教繁昌ヘシ

(九本、九ウ1)

○此法服等捧テは一具ツ、施与スヘシ

(九末、五ウ6)

○大宰府ヨリ唐船ヲ進メ明州ヘ到ルヘシ

(九末、二ウ2)

○龍田山ノ紅葉ヲ為ニ御覽一ノ椎坂ノ假宮令レ宿悦是ルヘシ

(九本、一四ウ5)

○相同輕ニ身命一重ニ佛法一心ヲ深シテ足ヲ早メテ到ルヘシ

(九末、五オ2)

〔タリ〕 5例

○是ハ則新羅皇帝ノ御使也日本ノ征軍等毒ニ酔伏シタラハ悉以爲ニ捕取ニ遠目仕ル物也

(九本、二ウ7)

○サレハ神明ニ人王ノ降ヲ乞ヒタラン

(九本、五オ7)

○弓ノ筈ニテ堀玉ヘル水也今ニ清水湛ヘタリ

(九本、一三ウ6)

○委細ハ推古天皇ノ勅記ニ見ヘタリ

(九末、一六オ5)

○其神三行合テ奉リタリトモ不可恐ル

(九末、五オ3)

〔ナリ〕 1例

(九本六オ4)

○神鬼歡喜ヲ奈以テ我朝ニ傳ヘ学シ流ルナリ

(九本六オ4)

〔ズ〕 1例

(九末、八ウ3)

○実ニ心モオクシテ足ノフミ所モ覺ヘサリケレトモ

(九末、八ウ3)

右に掲げたように、助動詞の種類としては限定的であり、「ケリ」については「ニ」に接続する用例が11例中5例と約半数になっている。助動詞「ベシ」については、7例全てが文末あるいはそれに準ずる箇所位置している注意される。

光久寺本の助動詞大書の用例は、「ケリ」が5例、「ナリ」が2例、「リ」が1例となっている。

〔ケリ〕 5例

○来目王子ハ寛宥シテ新羅皇帝命ヲウケテ筑紫へ帰朝シ給ケル程

(四本、五ウ2)

○俄臥ニ病床ニ終於筑紫ニ薨給ニケリ

(四本、五ウ2)

○光雲絶間シルヘニテ日影小馬早ツ、足任行程既衡山近ヲ付ニケリ

(四末、九オ5)

○太子御馬深水田ヲスチカヘニ打渡リ給ヒケレハ

(四本、一四ウ5)

○彼敵兵ヲ射<sup>レ</sup>ニ鎗ノ音如<sup>シテ</sup>雷電遠<sup>ク</sup>鳴廻遙<sup>リリ</sup>谷峯越<sup>ヲ</sup>行<sup>キ</sup>ケレハ

(四本、三才5)

○心細<sup>ク</sup>覺<sup>ヘ</sup>ケレトモ衣袴<sup>ヲ</sup>シクシテ騎馬ノカサリイサキヨク取ツクロヒテ参内王宮見渡セハ

(四末、六才1)

〔ナリ〕

○裘<sup>カキヌ</sup>笠<sup>カサ</sup>舄<sup>ス</sup>物用意スヘキナリ

(四末、三ウ6)

○是ハ延喜御門第七王子此砌ニナム暫住給ヘリケル其ニ當<sup>レ</sup>ルナリト云

(四本、一七才1)

〔リ〕

○是以有文郡類<sup>ノ</sup>澤<sup>ニハム</sup>昨<sup>ハ</sup>一鶴<sup>ハニ</sup>常弓矢ウカ、ヒ見<sup>ト</sup>云<sup>ヘリ</sup>

(四末、二四ウ4)

光久寺本では先に確認したように、内閣文庫本と比較して小書から大書への切り替えの用例数が少ないのであるが、「ケリ」については5例中2例が「ニケリ」となっており内閣文庫本と同様の傾向を示しているといえる。つまり、用例数から窺える同様の傾向は、質的にも同様の傾向を示していると言って良いだろう。

このような傾向となるのは、「ケリ」が大書されることのほか、「ニ」が小書されることと併せ考えなければならない。「ニ」は助動詞「ナリ」の連用形以外にも小書として用いられる。次に用例を掲げる。

〔助詞「ニ」の用例〕

○逃<sup>トモ</sup>不可叶<sup>ク</sup>「是非凡夫」即神明也トテ命ノ有テノ上<sup>ニ</sup>コソ朝

命<sup>モ</sup>勅<sup>モ</sup>勘<sup>モ</sup>オソロシケレ (九本、三才6)

○来目王子二月<sup>ニ</sup>王宮<sup>ヘ</sup>返<sup>リ</sup>給ハスシテ筑紫<sup>ニ</sup>シテ失<sup>レ</sup>給ケリ

(九本、六ウ6・6)

○朕侍<sup>ハ</sup>聞<sup>リ</sup>尺尊出世之本懷<sup>ヲ</sup>遂<sup>ニ</sup>給<sup>テ</sup>王舍城鷲峯山<sup>ニ</sup>シテ一乘法花<sup>ヲ</sup>宣<sup>フ</sup>説<sup>キ</sup>給ケル時<sup>ニ</sup>コソ

(九本、一八才5・6)

〔助詞「ニテ」の「ニ」の用例〕

○任那国<sup>ハ</sup>新羅<sup>ノ</sup>北<sup>ナル</sup>陵山<sup>ニテ</sup>合戦<sup>ス</sup>日本ノ軍兵<sup>ハ</sup>東城山<sup>ニテ</sup>タ、カイケリ

(九本、一ウ6・6)

○若合戦アラハ我<sup>カ</sup>昔<sup>ヲ</sup>衡山<sup>ニテ</sup>ノ名<sup>ヲ</sup>今<sup>ノ</sup>日本<sup>ニテ</sup>名<sup>ヲ</sup>称<sup>シ</sup>シテ

(九末、四才2)

〔副詞の一部の「ニ」の用例〕

○何<sup>ニ</sup>カハクルシカルヘキトテ国王大臣諸共<sup>ニ</sup>日本ノ將軍<sup>ニ</sup>降<sup>ヲ</sup>請<sup>ヒ</sup>給<sup>ヒ</sup>ケレハ

(九本、五才7)

○峨々タル路<sup>ヲ</sup>ツタイ眇々タル霞<sup>ヲ</sup>分<sup>テ</sup>我モくト行程<sup>ニ</sup>霜電<sup>ニ</sup>常<sup>ニ</sup>フリ下<sup>リ</sup>

(九末、一〇才4)

○往来ノ客<sup>モ</sup>ナカリケレハ路<sup>ヲ</sup>可<sup>レ</sup>問人モ更<sup>ニ</sup>ナシ鳥獸ノ音サヘオトツレス只寂寞無人ノ道スカラ

(九末、一〇ウ5)

右の用例のように、所謂古典文法では一語と考えられる語であっても、古典資料における単語意識は現代とは異なっているようで、「ニ」に共通する機能を見いだすことから小書をするのではないかと考える。

現代とは異なる単語意識については、以下のような用例がある。

○心ツヨクスキ行ク臣ノ思ヒサスカニ忍ビカタクソ覚ケル

(九末、一〇ウ3)

現代では形容詞「シノビガタシ」と認識したいところであるが、恐らく「シノビ」と「ガタシ」とでそれぞれ独立した単語であるという意識が窺える。

#### 四、おわりに

これまでのところを纏めると、まず同内容の本文であっても、漢字文と漢字仮名交じり文を一つの文章に混淆させる、表記体混淆文における片仮名の小書大書の切り替えの意義は共通にみいだせるということである。

次に、片仮名表記「ベシ」「ナリ」が漢字表記の「可」「也」に対応するということが漢字に準ずる形で大書されるということは想定されるが、真名本などの特殊な資料を除いて漢字表記との対応関係が希薄である「ケリ」についても大書されるということは、漢字との対応関係を背後に持たない単語意識が働いているものと考えられる。

小林賢章氏は、『応永記』にみられる小書「ケリ」について、『応永記』の真名化を試みた人物の中でも、この「ケリ」の存在そのものが邪魔であったはずである。しかし、文章の変更をしないという強い規範の中では「ケリ」を書かないわけにはいかなかった。

とされている<sup>10</sup>。真名化の際に「強い規範」によって残さざるを得ないということは、別の見方をすればそこに強い単語意識が働いたために無視あるいは省略ができなかったということにもなるのではないか。資料の違いによる大書小書の違いはあるが、助動詞「ケリ」についての意識は共通のものが垣間見えるように思う。

本稿で言及し得なかった点としては、本文に返り点があり、ルビ行に位置する仮名点とみられる片仮名との比較や、小書大書の切り替えに関わらない大書の用例との比較がある。今後の課題としたい。

1 国立公文書館請求番号特119-0009

2 本稿における「小書」「大書」とは、片仮名の相対的な大きさによる称で、主に漢字の直下にあつて右寄せで記される片仮名を小書、その小書に比して大きく通常の大きさで記される片仮名を大書としている。

3 漢字文と漢字片仮名交じり文とが混淆する文における片仮名自立語については、磯貝淳一氏が「高山寺本『打聞集』について―仮名表記自立語の検討を中心に―」（高山寺典籍文書総合調査団編『高山寺経蔵の形成と伝承』二〇二一年三月、汲古書院）において、『打聞集』を「教釈的文脈」と「説話的文脈」とに分けた上で、片仮名自立語が「説話的文脈」に多くみられることを指摘している。

4 片仮名小書大書の切り替えについては、藤井俊博『院政鎌



倉期説話の文章文体研究』（和泉書店、二〇一六年一月）の「第十五章打聞集の表記と単語意識―宣命書きの例外表記を中心に―」「第十六章法華百座聞書抄の宣命書きについて」において詳細に検討されている。

5 光久寺本は、慶應義塾大学附属斯道文庫編『斯道文庫古典叢刊之六中世聖徳太子伝集成 第五卷宝物集・拾遺抄・万徳寺本』（二〇〇五年四月）による。奥書が無く書写年代は不明であるが、内閣文庫本と同時期か遡るものと思われる。

6 品詞の認定に際しては、例えば「忍<sub>レ</sub>カタシ」の場合は形容詞とすべきであるが、切り替え部分で分解し動詞としているものがある。また、用例数には片仮名大書から小書への例は含めておらず、小書から大書のみとした。

7 文末に位置していることの意義については、小書から大書への切り替えに関わる用例だけではなく、小書大書仮名点を含めた全ての用例についての検討を要する。ここでは事実の指摘に留めたい。

8 小書の後大書される助動詞について、藤井俊博氏は『院政鎌倉期説話の文章文体研究』（和泉書店、二〇一六年一月）三七頁において「I 前に片仮名の大書の語句が来る場合とともに、前に片仮名の小書の語句が来る場合が併存する助動詞」として「けり」「ごとし」「べし」「たり」「なり」「まし」「ず」「す・さす」「しむ」を挙げられており、光久寺本における「リ」1例を除いては『打聞集』と同様の傾向を示しているといえよう。

9 この用例の小書「ヒ」については、表一の動詞の活用語尾に分類している。

10 小林賢章『「応永記」の真名化』（『人文学論集』一九八三年三月）

【付記】本研究はJSPS 科研費20K00653の助成を受けたものです。

（本学教授）